

歴史を未来へと繋ぐ者たち

佐賀県神埼郡吉野ヶ里町にある東妙寺は、元寇の祈願寺として創建された歴史ある寺である。古刹だけに多くの文化財を所有しており、令和に入ってから釈迦如来坐像と聖観世音菩薩立像、東妙寺并妙法寺境内絵図、東妙寺文書と国重要文化財を立て続けに修理した。そして2023年度に三菱財団の助成を受けて、未指定の十一面観音立像を修理。頭部のお顔をすべて失っていた十一面観音立像の修理は、同寺の早田空順住職の長年の願いでもあった。早田住職と、修理を担当された浦仏刻所の主宰仏師である浦 叡學師に、仏さまや文化財保護に対する想いを伺った。



修理前



修理後

木造十一面観音立像

像高(化仏含まず)165.4cm
髪際下148.4cm

申請者 宝珠山 東妙寺
事業名 木造十一面観音立像保存修理事業
事業実施期間 2023年10月～2025年9月
修復事業者名 浦仏刻所

全身を解躰したことで分かった 貴重な学術的資料

三菱財団 当財団の助成事業に応募されることになったきっかけについて教えてください。

早田住職 当寺にはさまざまな文化財がありましたが、少なくとも約100年は手を入れたことがありませんでした。しかし令和になって、展覧会への出展をきっかけに、当寺が所有していた4つの国重要文化財を修理しました。ここまで来たならば、十一面観音菩薩立像も修理したいと思ったのですが、未指定だったため、国重要文化財で受けた助成は使えません。修理費用を全額当寺が負担しようと覚悟をしていた時に、国宝・国重要文化財以外の修復を対象とし、かつ500万円以下であれば全額助成を受けられるという三菱財団の事業を知り、応募することにしました。仏さんの「皆で整いたい」という想いを三菱財団に伝えようと申請書類を書き、無事に助成を受けられることになってホッとしました。

三菱財団 十一面観音菩薩立像は、鎌倉時代に湛誉と湛真の手によって造られたと伺いました。

早田住職 運慶の流れを汲んでいる湛誉と湛真は、九州の彫刻史の中でも重要な役割を果たした仏師です。平成の時に佐賀県立博物館の調査としてマイクروسコープを入れた際に、胎内の墨書に二人の名前があったため分かったのですが、光の加減で読み取れなかった文字もありました。今回は修理の際に全身を解軀したことで、「石垣寺本尊」との墨書も明らかになりましたが、この周辺にそのような寺は現存しておらず、また学芸員さんや本山である奈良の西大寺も心当たりがなく、結局謎のままになってしまいました。しかし、本当に「石垣寺」の文字が読み取れた時には感動しました。



十一面観音立像の修理を手掛けた浦仏刻所の浦 観學師(左)と東妙寺の早田空順住職(右)

浦師 軀内に墨書があることで、いつ頃、誰が関わり、誰が彫ったのかが分かることもあり、その仏像からその周辺の歴史等を知ることができ、貴重な資料になることがあります。

三菱財団 全身を解軀したからこそ分かったわけですね。しかし、全部解軀する修理方法は珍しいと聞きました。

浦師 ^{かすがい}鉄くぎや鋳が錆びてボロボロになっていたりする仏さまの場合は解軀せざるを得ません。しかし解軀してしまうと、今度組み上げるときにねじれが出てきて調整が大変になるため、できるだけ解軀を避けたいところですが、十一面観音さまも剥ぎ合わせ箇所などに緩みが見られたため、竹下正博さん（現 佐賀県立博物館・美術館副館長、当時は佐賀県立佐賀城本丸歴史館 企画学芸課長）にご相談し、早田和尚の了解を得て解軀修理することになり、同時に軀内墨書の確認もできました。修理をする上では、学芸員の方と話し合うことが重要になってきます。例えば指が折れていれば祈ることができるよう、私は指や他の欠失箇所等をできるだけ元の状態に造ってあげたいと思いますが、文化財としての現状維持を重視する上ではそうもいきません。今回も竹下さんには何度も足を運んでもらって話し合いを重ねました。修理の過程においては、学芸員さんのような研究者と修理者が責任を分担し、役割を明確にした上で進めるというプロセスが重要になってきます。



【赤外線写真】

十一面観音立像の内部に書かれていた墨書が解軀により明確になった。

石垣寺本尊十一面観音 正和二年乙卯九月廿六日院主権少僧都興隆金剛行慶
大佛師上総法橋造譽
大佛師美濃法橋造具
天保六年未八月十五日
大佛師下園友市
文治
廟主壽恵

三菱財団 こうした発見は、地域の文化財としての価値をさらに高めることにもなりますね。

早田住職 未指定だった十一面観音立像は、今後町の指定文化財候補として検討してもらえということなので、これも修理作業のおかげだと思っています。

三菱財団 未指定の状態でご協力し、修理した結果、学術的な成果が認められて、そうしたお墨付きが付いたということであれば、本当に嬉しく思います。

修理の過程を見てもらう意図とは

三菱財団 今回、早田和尚は、檀家さんをはじめ学芸員さんや県の職員さんにもお声をかけて、解躰・修理されているところを実際に見に行かれたと伺いました。

早田住職 仏さまの分解された状態を一般にお見せするのはよくないという意見もあります。しかし、胎内墨書があることはすでに分かってたので、そこに書かれている当時の人々の想いを皆さんにお見せしたいと思いました。その想いが込められた仏さまをこの先50年、100年後の人たちに繋げるためには、こうした解躰を伴う修理が必要なんだということを、実際に見てもらおうと思い、浦さんに解躰するタイミングを教えてもらって、檀家の方や学芸員さん、町役場の方などと一緒に伺いました。

浦師 仏さまを守ろうとしている方々に来ていただいて、実際の修理の内容を見て理解していただくことは大事だと思っています。当日は竹下さんも来てくださっていろいろ解説をしていただき、私自身も勉強になるところがありました。そのため文化財の所有者の方には、ぜひ関係者の方々と一緒に修理の現場に来てください、と伝えています。

三菱財団 2023年10月から修理が始まって、2025年9月に修理が終わり、同年11月に十一面観音さまはお寺に戻られたんですね。

早田住職 もう感無量でした。特にお顔を見た時には本当のお姿に戻れたと感じましたね。修理前は頭部の11のお顔が失われていたのですが、文化財は今の状態を維持することが大事だと言われていたので、お顔を戻すということは当初頭になかったんです。しかしやはりなかなかあきらめきれずに竹下さんに相談したところ、お顔を復元しようと言ってくださって。その時は本当に嬉しかったですね。あの時、思い切って言わなかったら、今のお姿にはなれなかった。観音さんが健やかな元のお姿に戻りたいって思っていたのが感じられましたし、その想いを修理に協力してくださる方々に繋ぐことは大事なことだと思います。



約2年の修理を経て、十一面観音立像は慎重に東妙寺に移された。感無量の想いで向き合う早田住職。

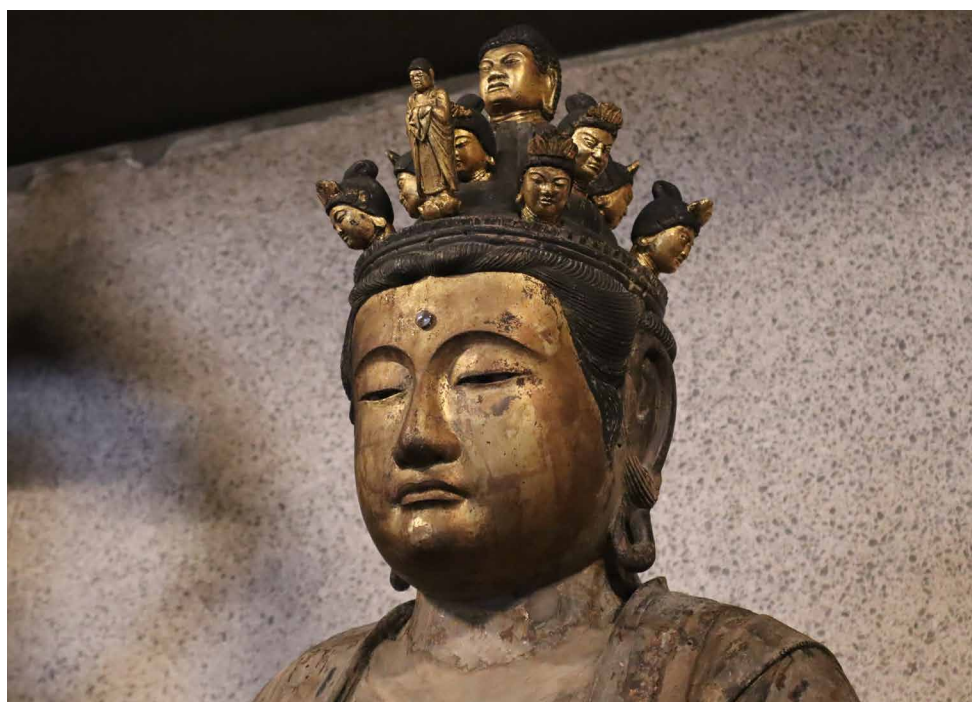
浦師 私としては、頭部の十一面を新しく補うことは本当に悩みました。東妙寺さんの十一面さまは全て失われていましたので何を参考にして良いのか困っていた時に、竹下さんから湛誉と湛真、師匠の湛康が参加したという佐賀県小城市にある三岳寺の十一面観音像を参考にしたらとご教示いただきました。三岳寺の十一面観音像も頭上面が全て揃っていたわけではありませんが、参考にさせていただき、雰囲気できるだけ合わせて修理しました。

早田住職 その他にも、失われた白毫には水晶を入れていただき、また両眼の木眼からもととの水晶の玉眼に変えていただいて、あと水瓶も新たに作っていただきましたね。

浦師 十一面観音さんがお持ちになられているのは水瓶というのが基本の形なのですが、時代によって水瓶の形や模様が全然違うんです。そこも竹下さんと相談してシンプルのほうがいだろうと。参考文献の中からその時代に合うような造形を探して修理していきました。



三岳寺の十一面観音立像
を参考に修理された頭部



鮮やかによみがえった
十一面観音立像

文化財保護のためには、 助成金だけでなく「自助努力」も必要

早田住職 2026年2月の節分法要で初めて修理後の観音像を公開しました。拝観された皆様からは、「きちんと十一面になられた」「お顔がすっきりして笑顔になっている」などの感想が寄せられました。本当に帰ってこられたらお顔が生き生きとされていました。あとは、お寺にある多聞天と広目天の二天さんの修理については浦さんにお願ひできれば…

浦師 二天さんは十一面像の脇に立たれていたと思われる大事な仏さまなんです。十一面観音さんと二天さんが揃って初めて完全なお姿になるので、私も「なんとかならないか」と、いつも和尚さんや竹下さんと話しています。実は、もう準備してあるんです。前住職さんから、二天さんを何とかできればというお話があったので、いつでも始められるように用意していました。

早田住職 それは知らなかった！今は檀家さんを中心に、当寺に訪れてくださった方に、修理費用の募金を呼び掛けているところです。

浦師 文化財の保護は今後どんどん厳しくなってますね。未指定の仏さんのことを私はよく「路傍の文化財」というのですが、地域で守っている仏さんも、国重要文化財も、大事に守っていかなければいけないという点では変わらないと思っています。しかし、地域で守ってきた人たちは高齢になっていて、守ろうという人たちが少なくなっています。

早田住職 文化財は自分たちが手をかけなくても勝手に存続すると思っている方も多いと思うのですが、守る努力をしないと未来に遺すことはできません。それも一人では無理ですね。地域の人々が自らの手で守ろうとする意志と行動、つまり「自助努力」があってこそ、助成金のような外部からの支援が意味を持ってくると私は考えています。

浦師 そうですね。地域全体の文化意識を上げていかないといけないと感じています。先ほど、修理の現場に来てほしいと話したのも、信仰の中の仏さまと同時に、修理を通して文化財として未来に繋いでいくための理解を深めていただきたいという思いがあります。一方で、「自助努力」があっても、修理の費用は高額のため、大きな壁になっているケースはたくさんあります。私も日々いろいろな修理の依頼を受けますが、費用面で困っている場合は、三菱財団の助成事業をお勧めしています。県や市町村の指定文化財、もしくは未指定の文化財に助成金を出して下さって、個別事情に柔軟に対応いただける制度は他になかなかありません。民間財団だからこそ可能な対応であり、真のメセナだと私は思っています。

三菱財団 ありがとうございます。当財団が助成対象を「国宝や国指定の重要文化財以外」「保存、修復に伴う社会的意義の高いもの」としているのは、まさにそうしたご要望に応えたいという想いからであり、当財団の存在意義はそこにあると思っています。今日は改めて当財団の在り方についても考えさせられる機会となりました。貴重なお話をありがとうございました。